



調査次数	調査地区	面積	調査期間	調査地	所有者等	備考	担当者	概報頁
藤原宮 71-15	6 A J F - Q	80㎡	94. 3. 7~ 94. 3.14	檀原市縄手町170-1 (宮西方官衙地区)	中西利一	擁壁工事等	村田 和弘	17
75-1	5 A J L - F	100㎡	94. 4. 4~ 94. 4.21	檀原市四分町302 (宮西面外濠)	檀原市	道路拡幅	深澤 芳樹	35
75-5	5 A J H - P・H・A 5 A J G - F・N 5 A J C - U・N	630㎡	94. 6.28~ 94. 7.18	檀原市四分町他(宮内)	檀原市	四分木之本 線水道管布 設替	深澤 芳樹	36
75-6	5 A J G - U	84㎡	94. 7.14~ 94. 8. 2	檀原市四分町 293-2・294 (宮西方官衙地区)	檀原市	四分団地建 替	大脇 潔	13~16
75-7	5 A J F - Q	160㎡	94. 7.19~ 94. 8. 5	檀原市縄手町167-6 (宮西方官衙地区)	田村進・隆 久	作業小屋建 設	大脇 潔	18~19
75-9	5 A J C - P	14.6㎡	94. 9.14~ 94. 9.22	檀原市高殿町245 (宮内)	三橋米次	住宅建替	島田 敏男	36
75-12	5 A J E - U	436㎡	94.10.11~ 94.11.15	檀原市醍醐町43-5 (宮西方官衙地区)	森口清信他	宅地造成	佐川 正敏	20~24
75-13	5 A J B	384㎡	94.11.10~ 94.11.28 94.12. 1~ 94.12. 8	檀原市高殿町(宮内)	檀原市	道路拡張	金子 裕之 橋本 義則	25~34
75-14	5 A J K - C	70㎡	95. 1.23~ 95. 1.27	檀原市縄手町 199-4・192-1・6 (宮内)	檀原市	歩道拡張	橋本 義則	未収録
75-18	5 A J G	200㎡	95. 3. 7~ 95. 3.27	檀原市四分町 (宮西方官衙地区)	檀原市	四分団地造 成	藤田 盟児	未収録
76	5 A J G - S・R	2050㎡	94. 8. 1~ 94.10. 5	檀原市四分町288・289 (宮西方官衙地区)	檀原市	四分団地造 成	佐川 正敏	7~12
77	5 A J L - E 5 A J G - T	900㎡	94.12. 1~ 95. 2. 6	檀原市四分町 (宮西方官衙地区)	檀原市	四分団地造 成	藤田 盟児	未収録

Tab. 3 藤原宮の調査一覧

# 1 西方官衙地区の調査

## A 第76次調査

(1994年 8月～10月)

本調査は奈良県橿原市が四分町288・289番地において予定している住宅改良事業用地の造成に伴う事前調査である。調査区は東西50m、南北40mで設定し、東を若干拡張したので、調査面積は2050㎡となった。1994年8月1日から上土掘削を開始、同年10月5日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。本調査区は藤原宮西方官衙地区にあたり、宮西面南門の北東部、すなわち宮内先行条坊の五条西二坊東南坪に位置する。調査区の北では鴨公小学校の移転（第5～9次調査）や個人住宅の建設に伴い（第54-9、58-2、60-13、63-10次調査）、西では鴨公幼稚園の建設に伴い（第33次調査）、東では倉庫の建設などに伴い（第27-9、63-5、63-8次調査）、南では四分団地の建て替えに伴い、発掘調査が数次にわたって行われてきた。その結果、宮内先行条坊五条西二坊東南坪の北半には、四周を掘立柱塼 S A 1215・1216・6985・7000で囲まれた長方形の区画があることが判明した。この区画の北辺の塼 S A 1215は宮内先行条坊の五条々間路南側溝の内側に、東辺の塼 S A 6985は宮内先行条坊の西一坊大路西側溝想定位置の内側に、それぞれ位置するので、区画は先行条坊側溝の掘削後の宮直前期に設置されたと考えられている。本調査区では、その区画の南辺の塼 S A 7000の西半部と西辺の塼 S A 1216への曲がり角、さらにその区画の南の利用状況が明らかになると予想された。また四分団地にあった弥生時代の集落に北接する空間の利用状況についても、情報が得られると期待された。

### 遺 構

調査の結果、弥生時代から藤原宮期までの遺構を検出した (Fig. 3)。なお、多くの土坑の所属時期は出土遺物の整理を待って決めたい。

**藤原宮期とその直前の遺構** 遺構は耕土・床土直下で確認できるが、本来の生活面はすでに削平されている (Fig. 2)。掘立柱建物4棟 (S B 8200～8203)、掘立柱塼4条 (S A 1216・7000・8204・8205)がある。S B 8200は調査区東南隅にある桁行5間以上 (柱間寸法約2.1m)、梁行2間 (柱間寸法約2.4m)の南北棟で、柱掘形は一辺1m強と大きい。S B 8201は調査区南寄り中央にあり、桁行3間、梁行2間の東西棟で、柱間寸法は1.5～1.8mである。S B 8202は調査区西南隅にあり、桁行3間、梁行2間の南北棟で、柱間寸法は1.5mである。北で若干西に振れ

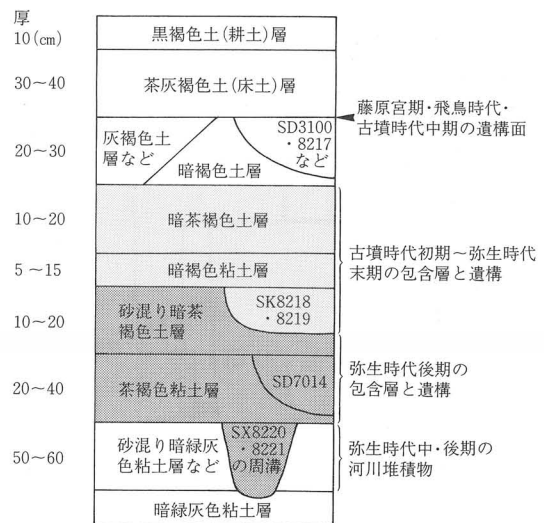


Fig. 2 第76次調査基本層序模式図

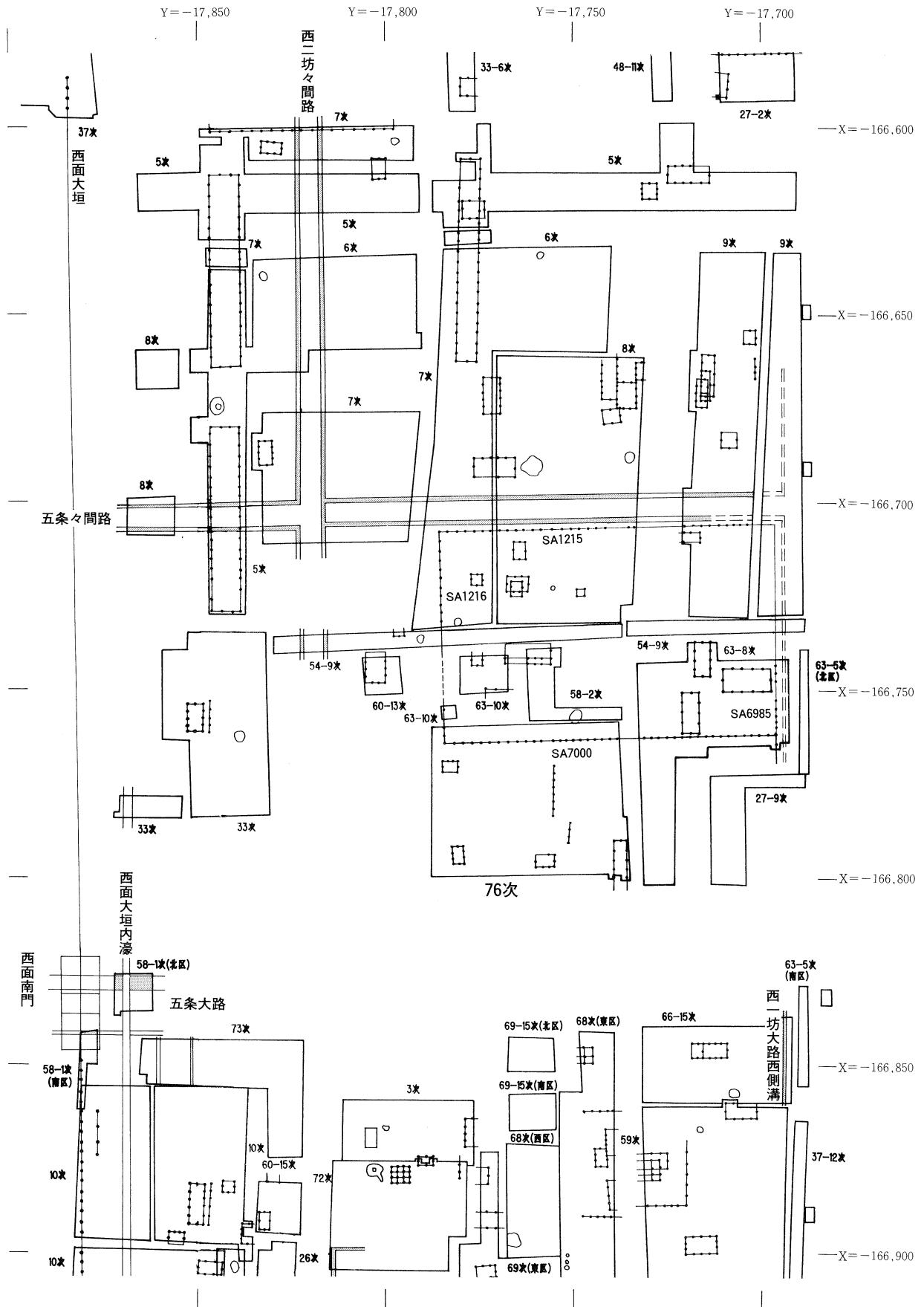


Fig. 3 第76次調査位置図および周辺調査の藤原宮期等の遺構 (1 : 1500)

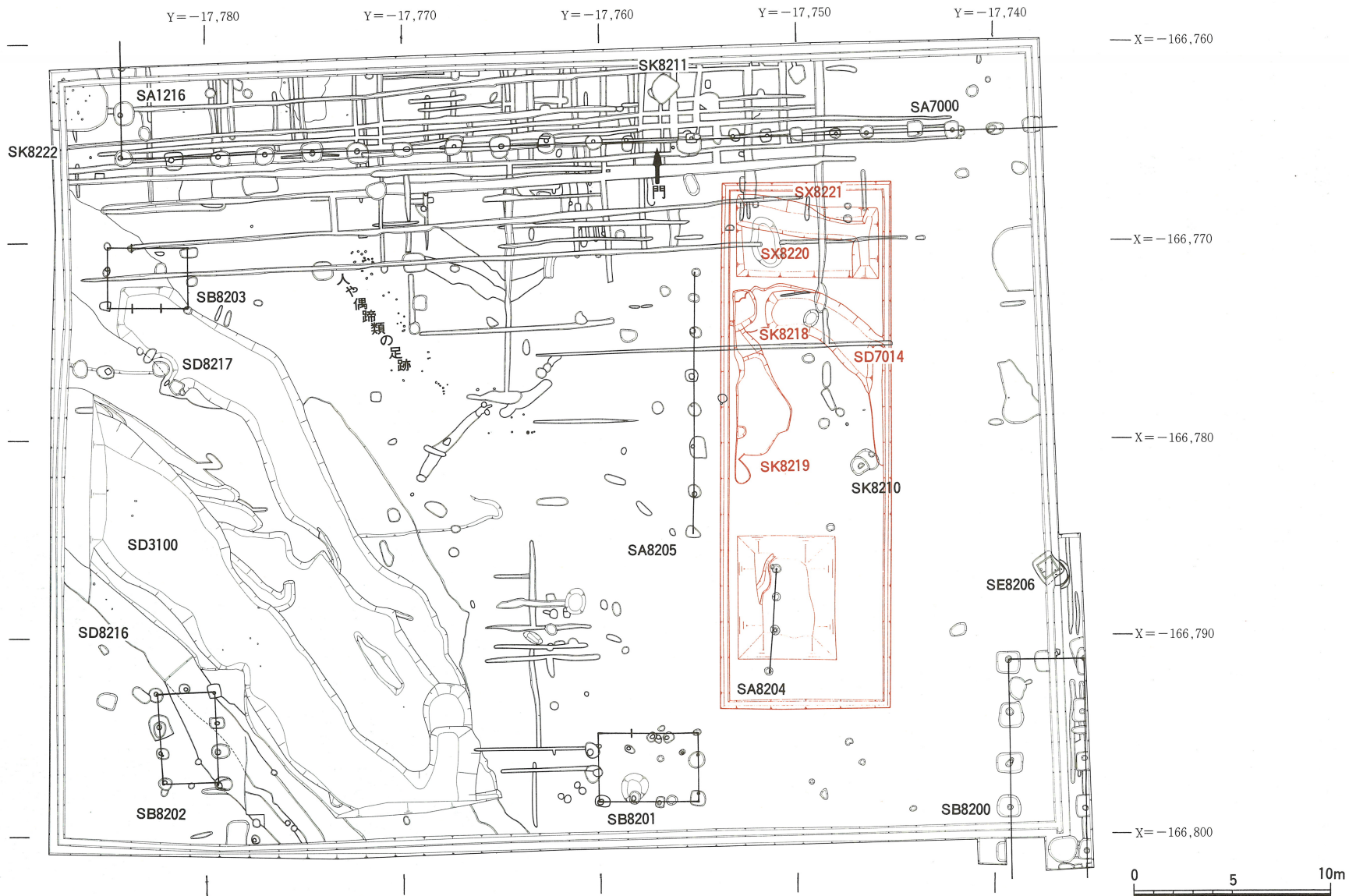


Fig. 4 第76次調査遺構図 (1 : 300)

る。S B 8203は調査区西寄り中央にあり、東西2間(約4 m)、南北2間(約3 m)で、柱間寸法は不揃いである。第63-8次調査で検出されたS A 7000の西半が、21間分検出できた。さらにこれが調査区西北隅で北に曲がり、第6次調査で検出されたS A 1216につながる事が判明した。S A 7000は柱間寸法が1.5~2.4mで、西寄りの掘形平面は東のものに比べて大きく、かつ深い。S A 1216は2間分を検出した。その柱間寸法は2.1mである。S A 8204はS B 8201の東北にあり、柱間寸法が1.5~2.1mの南北塀(3間)で、掘形は浅い。北で東に若干振れる。S A 8205はS A 8204の西北にあり、柱間が1.5~2.4mの南北塀(7間)である。

**飛鳥時代の遺構** 井戸S E 8206は調査区東壁中央の床土直下で検出した(Fig. 5)。北で西に45°振れることから、その所属時期を飛鳥時代と推定している。掘形は一辺1.3~1.5mの方形で、深さは1.5mと浅い。井戸底は後述する弥生時代の河川S D 7014の埋土である灰色砂層の上にあたる。井戸底に三枚組接ぎによる蒸籠組の井戸枠が一段分残されている。男木は長さ80~83cm、幅18~24cm、厚さ3cmの板を材料とし、柄の長さは4.5~5cmである。女木は長さ92~94cm、幅24cm、厚さ3cmの板を材料とし、柄の長さは6.5~7cmである。井戸の掘形の深さからみて、井戸枠は少なくとも三段分あったと推定される。井戸枠の内面に沿って、自然木の先を削って尖らせた木杭10数本を井戸底から地下1mほど打ち込み、井戸枠の外面に土と木切れを入れて裏込めして、井戸枠を固定していたらしい。井戸枠のうち2枚の井戸底に接していた面に、太柄穴が残っているので、これらは別の井戸枠もしくは建築部材を転用したと考えられる。この太柄は再利用の際に、すでに抜かれている。

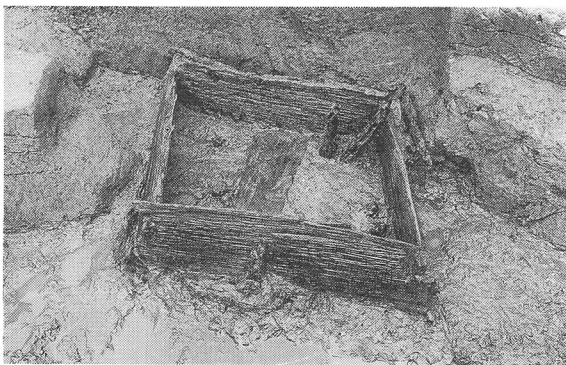


Fig. 5 飛鳥時代の井戸S E 8206 (西から)



Fig. 6 古墳時代の河川S D 3100 (北西から)

**古墳時代の遺構** 床土下の灰褐色土層を掘り下げ、現地表下0.7~1mで旧河川3条(S D 3100・8216・8217)を検出した。いずれも東南から西北へ流れる。切り合いから、S D 8217→3100→8216の順に新しくなる。S D 8217は幅2m前後、深さ0.5mで、その埋土には土師器のみを含む。S D 3100は第33次調査でも検出されており、幅4~8m、深さが最も深い所で2m以上ある本格的な河川である。岸が崩落する危険があったので、川底の検出は断念した。その埋土の大半は砂層と礫層の互層からなる。そこから5世紀後半の土師器と須恵器、韓式土器が出土し、とくに埋土最上層からの出土量が最も多い。S D 8216は幅約1m、深さ10cm程で、埋土には土器の細片を含む。なおS D 8217にほぼ平行して、人

と偶蹄類の足跡を多数検出した。

**弥生時代の遺構** 弥生時代の遺構・遺物を検出するために、下層調査区（面積243㎡）を設定した。基本層序灰褐色土層下の暗茶褐色土層とその下の暗褐色粘土層からは、弥生時代末期～古墳時代初期の過渡期の土器が出土した。それらを順次掘り下げて、砂混り暗茶褐色土層上面で土坑2基（S K 8218・8219）を検出した。出土土器からみて、弥生時代末期～古墳時代初期の土坑である。砂混り暗茶褐色土層からは弥生時代後期の土器が多量に出土した（Fig. 7）。その下位の茶褐色粘土層上面で旧河川1条（S D 7014）を検出した。埋土の灰色砂層から弥生時代後期の土器が出土した。S D 7014は第63～8次調査で見ついている河川のつづきである。下層調査区の南北にさらに深掘区を設定した。



Fig. 7 弥生時代後期土器の集中（西北から）

その結果、まず北区では、砂混り暗緑灰粘土層

上面で方形周溝墓2基（S X 8220・8221）を部分的に検出した。S X 8220の北側の溝がS X 8221の南側の溝となり、両者の東側の溝は南北方向に連続する。その一辺は6 m以上あり、残存する周溝の上幅は2 m、深さは1.5 mである。砂混り暗緑灰色粘土層から暗緑灰色粘土層までの土層を削り出し、上に封土を盛ったのであろう。封土部分はすでに削平されている。周溝から土器片が1点出土したが、細片のため時期は特定できない。しかし、層位的にみれば、S X 8220・8221は弥生時代後期のものと推定される。なおS D 7014より北の砂混り暗緑灰色粘土層から暗緑灰色粘土層までの土層は、後述する南区に比べて安定している。つぎにS D 7014より南は砂とシルト、粘土の互層の厚い堆積物が確認され、流れを何度も変えた旧河川の堆積土の一部であったことが判明した。堆積土からは弥生時代中～後期の土器と流木が出土した。

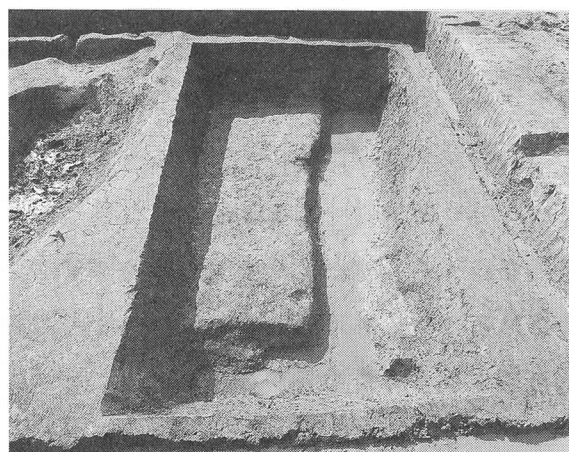


Fig. 8 方形周溝墓S X 8220・8221（東から）

#### まとめ

**先行条坊五条西二坊東南坪の北半の区画** 本調査によって、この区画の東西幅が87.5～88 m、南北幅が58.2～58.8 mであることが判明した。南辺の塀S A 7000は東西41間である。西から12間目が幅3.8 mと広く、12間目の柱がS A 8205の延長上にあることから、ここが門だった可能性がある（Fig. 4 ↑印）。北辺の塀S A 1215は41もしくは42間、西辺の塀S A 1216は推定25間である。さて区画の位置や規模は何を基準に設定されたのだろうか。S A 1215の位置が先行条坊五条々間路に、S A 6985の位置が西一坊大路に規制されていることから、この区画の造営時期は従来、

先行条坊の側溝を掘削した宮直前期に近い時期と考えられてきた。区画の東西幅87.5～88mは、藤原京の地割りの基準値である750大尺の $\frac{1}{3}$ の250大尺である。区画の南北幅58.2～58.8mは、完数尺が得られないが、先行条坊五条大路北側溝と五条々間路南側溝の間の敷地のほぼ $\frac{1}{2}$ にあたる。その後この区画内の建物配置が大きく改変されるとか、区画塀を切る新しい建物が建てられることはなく、この区画は先行条坊の西一坊大路を宮内道路とする藤原宮期にも存続した可能性がある。第63-8次調査では、この区画の東南隅のS A 6985が南へ少なくとも1間延びることが確認されている。しかし、S A 6985はさらに南の第27-9次調査区までは延びていなかった。また、本調査区で検出したこの区画の西南隅で、S A 1216が南へ延びることはない。したがって、この区画の南側に同規模の区画はない。また、区画の南側で検出された建物も少ない。藤原宮の西側の西面中門寄りの官衙については、馬寮が候補に挙げられている（『報告』Ⅱ）。平城宮では西面中門佐伯門に接してその南北に馬寮があり、さらに藤原宮西面中門の東南部でも桁行18～20間の長大な建物4棟が整然と建てられているからである。ともあれ、文字資料の発見を待って、官衙の機能に結論を下すことになろう。

**推定飛鳥時代の井戸 S E 8206** 井戸 S E 8206は、蒸籠組井戸としては飛鳥・藤原地域で最古の部類に属する。この井戸の時期をさらに絞り込む遺物はみつからなかった。本調査区には S E 8206と同様の振れをもつ建物遺構はないが、約100m西方の第33次調査区には S E 8206と同様の振れをもつ掘立柱建物 S B 3085～3088がある。あるいは両者の間になんらかの関連があるのかもしれない。

**古墳時代の旧河川 S D 3100の土器はどこから捨てられたか** S D 3100の埋土最上層は暗褐色土で、出土土器には完形品が多く含まれており、しかも遠方から流されてきた形跡がない。本調査区でこの時期の住居跡はみつかっていないが、本調査区の南で行われた第3次調査で、土坑 S K 580と井戸 S E 555・669から同時期の土師器と須恵器が出土している（『報告』Ⅲ）。したがって、四分遺跡には土坑や井戸を含む古墳時代の集落があって、そこから S D 3100に土器が廃棄された可能性が高い。

**弥生時代四分遺跡の北側の様相** 弥生時代後期の土器を比較的多く含む土層は、下層調査区以外に、古墳時代の河川 S D 3100の兩岸断面でも確認できるので、四分遺跡の北側にも後期のあたる段階の生活廃棄物の廃棄場があったようだ。つぎに第69-12次・第71-1次調査などによって、弥生時代四分遺跡の北側には、方形周溝墓がまとまって存在した可能性が高まっている。今回検出した2基の方形周溝墓 S X 8220・8221は、それらの一群をなすものであり、従来検出されたもののなかで、集落に最も近接している。その時期は層位的にみて、弥生時代後期と推定される。さらに下層調査区の深掘南区の土層の堆積状況からみて、弥生時代中期から後期にかけてのある段階に、四分遺跡の北側で、洪水が頻繁に発生したと推定される。



B 第75-6次調査

(1994年7月～8月)

本調査は、市営住宅の建設に先立ち、榎原市四分町で実施したものである。調査地は、藤原宮西方官衙地域にあたり、第69次東区の南、第69次西区の東に位置する。今回の調査では、藤原宮期における当地域の利用状況と、下層の弥生時代集落の広がりを確認することを目的とした。東西7m、南北12mの範囲を上層と下層にわけて調査した。調査面積は84㎡である。

遺構

**上層遺構** 調査区の基本的層序は、上から現代の盛土、水田の旧耕土・床土・黄灰色砂質土・灰褐色微砂質土の順であり、上層遺構は、灰褐色微砂質土の上面で検出した。

上層で検出した主な遺構には、小規模な掘立柱建物SB8340と、東西溝SD8335がある。

SB8340は、桁行3間、梁行2間の南北棟建物である。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m前後でばらつきがあり、直径約10cmほどの柱痕跡が残る。柱穴出土の遺物が少ないため、その所属時期は明らかではないが、藤原宮期直前から藤原宮期にかけての遺構と考えられる。

東西溝SD8335は、幅約1m、深さ約0.1mの浅い溝であるが、周辺の調査区では延長部分を検出しておらず、その性格は不明である。7世紀後半の土器が少量出土した。

**下層遺構** 東西5.5m・南北11mの調査区で、下層の調査を実施した。層序は、藤原宮期の遺構を検出した灰褐色微砂質土から下に順に、明黄灰色粘質土、黒褐色土、黄色土混黒褐色土、青灰色砂質土（地山）である。弥生時代の遺構検出は青灰色砂質土上面で行った。その結果、弥生時代中期に属する土坑や溝などがみつき、調査地北端の井戸SE8332からは特に豊富な遺物が出土した。

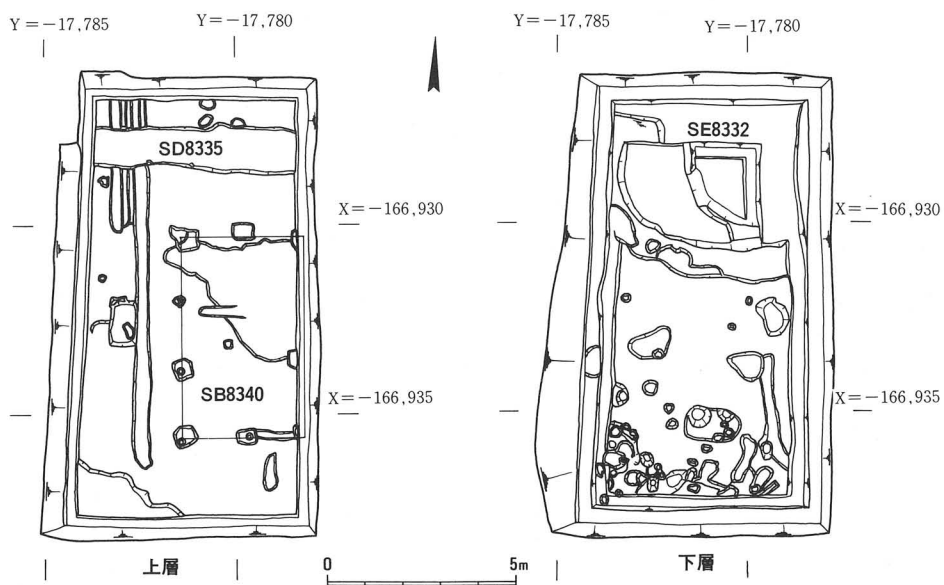


Fig. 9 第75-6次調査遺構図(1:200)

S E 8332は掘形上面が直径5.5m内外の円形に近い素掘り井戸で、深さは1.7mである。底から30cmほどは礫混青灰色砂に達しており、特に湧水が激しかった。この井戸からはおもに弥生中期前半の土器に伴って木製の鋏・斧柄・腰掛・容器、用途不明の鹿角製品、さらにクマネズミ属 (*Rattus* sp.) 頭骨・穿孔されたイノシシの下顎骨などが出土した。



Fig.10 S E8332出土木製品 (1) (1 : 4)・鹿角製品 (2) (1 : 3)

#### 藤原宮第75-6次調査 (四分遺跡) における寄生虫卵・植物遺体分析

**試料と方法** 試料は、井戸 S E 8332の上部・中部・下部および地山の計4点である。

寄生虫卵分析は、試料 1 cm<sup>3</sup>にフッ化水素酸処理を施しプレパラートを作製して行った。1 cm<sup>3</sup>あたりの出現数は計数比から算定した。

花粉分析は、試料に水酸化カリウム処理、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の各処理を施し行った。花粉出現量 (定量) については、その計数比から試料 1 cm<sup>3</sup>の出現数を算定した。

種実同定は各々100ccを0.25mmの篩で水洗選別し、分類を肉眼および実体顕微鏡下で行った。

**寄生虫卵分析 (Tab.4)** 寄生虫卵は回虫類、鞭虫類、 Manson 裂頭条虫が検出された。中部において試料 1 cm<sup>3</sup>あたり1000個以上寄生虫卵が検出され、下部においても500個以上であった。地山からは何も検出されなかった。中部と下部では鞭虫類卵が多い。寄生虫卵のかなりの汚染

学名	分類群	和名	(1/10cc中) 部位	5AJG-WF83大土坑			5AJG-WF84 大土坑地山
				上部	中部	下部	
<i>Ascaris</i>		回虫類	卵殻	4	3	8	
<i>Trichuris</i>		鞭虫類	卵殻	8	102	45	
<i>Diphyllobothrium mansonii</i>		Manson 裂頭条虫	卵殻	2	7	9	
Total		計		14	112	62	0
		(1cm <sup>3</sup> に算定)		(140)	(1120)	(620)	(0)

Tab.4 寄生虫卵分析結果

およびなんらかの糞便の堆積物が、S E 8332に堆積しているとみなされる。

花粉分析 (Fig.11) 結果は図に示した。各試料とも樹木花粉より草本花粉が多い。上部ではイネ属型を含むイネ科が優占する。中部と下部ではヨモギ属やオナモミ属が多い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が主に優占する。

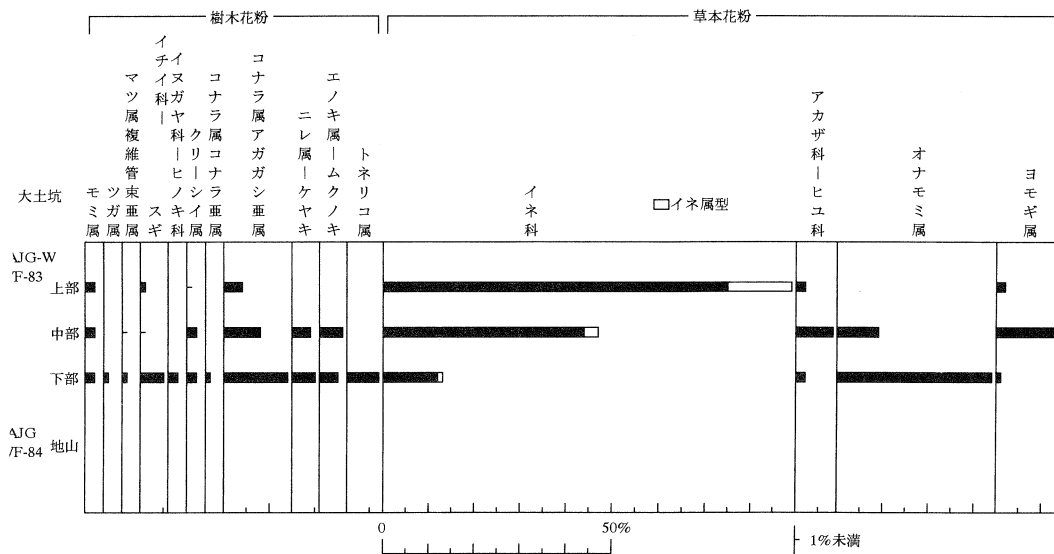


Fig.11 主要花粉組成図

種実同定 (Tab.5) 種実は数量が少ない。ウリ類・イネの食用となる栽培植物の種実がやや多い。他はイネ科・タデ属・ナデシコ科などの雑草類が検出された。

分類群			5AJG-WF83大土坑			5AJG-WF84
学名	和名	部位	上部	中部	下部	大土坑地山
herb	草本					
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎	17	15		
<i>Setaria</i>	エノコログサ属	穎				1
Gramineae A・B	イネ科A・B	穎	4	3		
<i>Fatoua villosa</i> Nakai	クワクサ	種子	1			
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	2	2		
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実				1
<i>Polygonum</i> A・B	タデ属A・B	果実	2	2		
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1			
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	3	7		5
<i>Toriiis japonica</i> DC.	ヤブジラミ	果実		5		
<i>Perilla</i>	シソ属	果実		1		
Solanaceae	ナス科	種子	1			1
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	10	1		1
		破片	4	3		1
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実	8	2		4
Total	合計		54	41	14	0

Tab.5 種実同定結果 (試料100cc中)

推定される植生と環境 (Fig.12) S E 8332の堆積物の分析結果では、鞭虫類を主とする寄生虫卵の出現密度がかなり高いため、多くの糞便の堆積が含まれているとみなされる。肝吸虫・横川吸虫が含まれていないため、寄生虫卵組成からヒトの糞便に起因するかどうか判断できない。花粉分析ではヒトの糞便に起因する食用植物の花粉は認められないといってよい。種実で

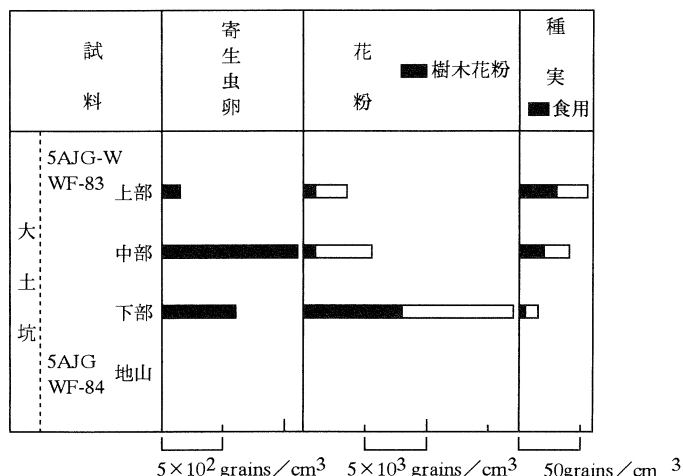


Fig.12 寄生虫・花粉・種実出現図

染域であったと考えられる。

人体寄生虫である回虫・鞭虫と飼育されたブタに寄生するブタ回虫・ブタ鞭虫の卵殻は、形態的に区別が困難である。回虫類と鞭虫類はヒトとブタにのみセットで感染するため、これらがブタ起因の寄生虫卵である可能性も考えねばならない。マンソン裂頭条虫はイヌ・ネコ・キツネなどに感染する寄生虫であり、ヒトは中間宿主となる。このためここではイヌに起源するとみなされる。よって、S E 8332の埋没段階にブタやイヌの糞を集めて投棄した可能性もあると考えられる。これらの仮定に立つならば、四分遺跡ではかなりの数のブタとイヌが家畜として飼われていた可能性があるだろう。ただし、現状では対比資料がなく仮定的ないし理想的な解釈を抜け出しえない。

周囲の植生であるが、中部と下部からはオナモミ属やヨモギ属が繁茂し、やや乾燥した状態であったと推定される。上部では、イネ属型を含むイネ科の花粉が多いため、水田が近接して広く分布するようになったとみなされる。森林植生としては、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が地域的な森林として分布していた。ただし、上位に向かってコナラ属アカガシ亜属は減少する。トネリコ属は湿地林を形成するため、トネリコなどの湿地林が近くにあったことが推定される。

《参考文献》

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』 1992年

金子清俊・谷口博一『新版 臨床検査講座 8 医動物学』医歯薬出版 1987年

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992). Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science 19.

金原正明「便所堆積物からさぐる古代人の食生活」『助成研究の報告4』味の素食の文化センター 1994年

金原正明「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 1993年

(金原正明・金原正子・中村亮仁)

は、ウリ類の種子が含まれるものの、イネは穎（籾殻）であり、雑草類も多い。また、層位的な変化において寄生虫卵・花粉・種実の出現傾向は一致しない。ヒトの糞便だとすれば、一度乾燥した分解的な環境下におかれ弱く小さな吸虫類の卵が分解した後、汚染的に再堆積した可能性を考えねばならない。この場合、近接して高密度の汚染源があったか人口密度が高く、その汚

C 第71-15次調査

(1994年3月)

本調査は個人住宅の新築にともなう事前調査である。東西4m、南北20mの調査区を設定した。調査地は宮内西方に位置する。調査区の近辺では、かつて第27-6次調査、第66-2・3・4次調査において、中世環濠集落の環濠を検出し、環濠の規模を推定している。本調査区は第66-3次調査区と第66-4次調査区のほぼ中間に位置し、本調査でも中世環濠の検出が期待された。基本的な層序は、地表面から耕土・床土・暗灰褐色粘質土・淡灰色砂質土（地山）の順で、遺構を検出したのは暗灰褐色粘質土面である。

検出した遺構は溝1条と土坑4個である。

SD7293は幅約4.4m、深さ70cmの東西溝である。溝内から軒平瓦6641C形式・6275A形式と多量の羽釜類や14世紀主体の土師器皿・灯明皿が出土した。出土位置、出土遺物から考えて、第66-3・4次で検出した中世環濠と考えると間違いはない。

4つの土坑のうち、北端の土坑からは14世紀代の瓦器が出土した。その他の3つの土坑は当初、建物の柱穴と思われたが、その東西に並行する柱穴はなく、深さもそれぞれ異なることから現時点では建物の柱穴とは考えられない。

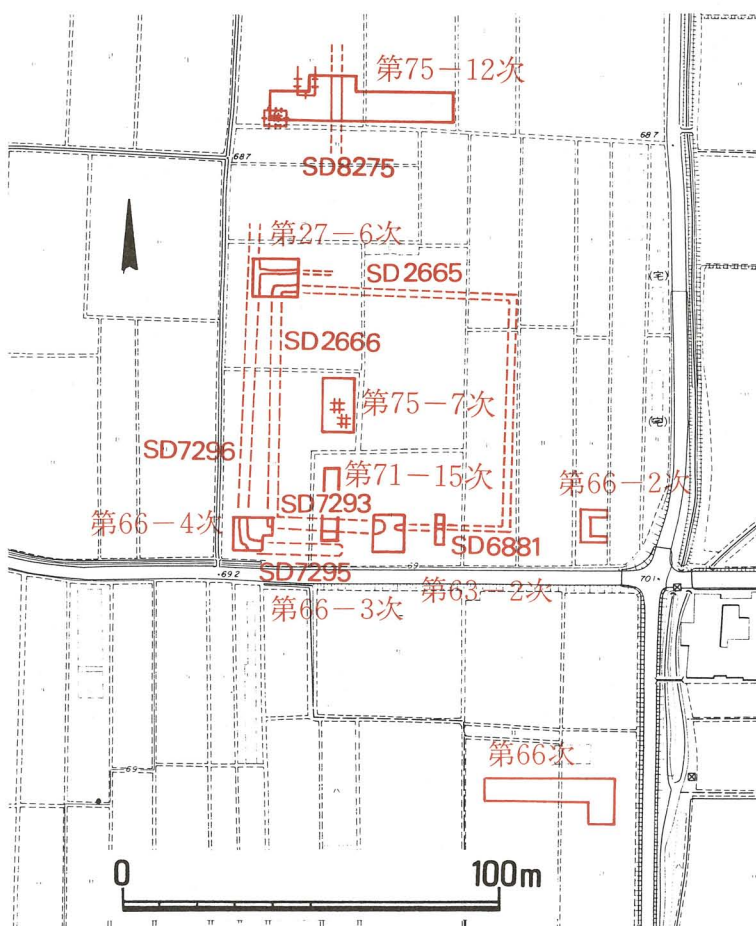


Fig.13 第71-15次、75-2・7次調査位置図 (1:2000)

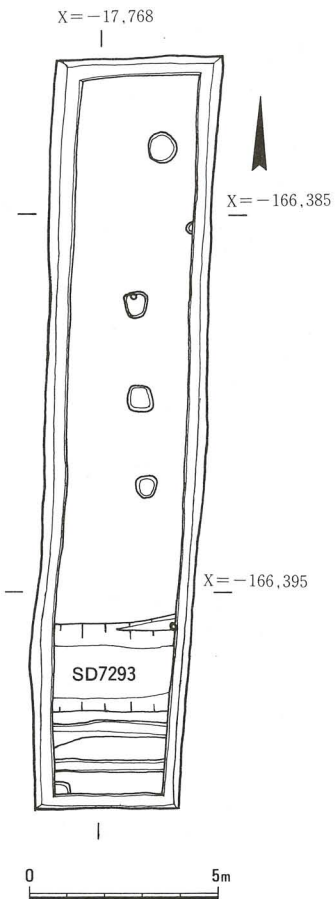


Fig.14 第71-15次調査遺構図 (1:200)

D 第75-7次調査

(1994年7月～8月)

本調査は、作業小屋建設に先立ち、樫原市縄手町で実施したものである。調査地は、醍醐池の西方で藤原宮西北部にあたる。しかし、周辺の調査では、後世の削平が著しく、宮に関する遺構はほとんど検出されていない。ただし、第27-6次調査、第63-2次調査、第66-2・3・4次調査では、14世紀頃の土器をともなう二重の環濠をめぐらした方形の区画の存在が判明している。今回の調査地は、この方形の区画内中央西寄りの位置にあたる。南北15m、東西8mの範囲に調査区を設け、調査面積は120㎡である。

調査区の基本的な層序は、上から水田耕土・床土、黄褐色ないしは灰褐色砂質土の地山となる。

しかし、床土の直下から掘り込まれた多数の土坑による攪乱が著しく、遺構は灰褐色砂質土の上面で検出した。

検出した遺構には、井戸2基と多数の方形をなす土坑群がある。

井戸S E 8350は、大形の円形掘形をもつ方形縦板組横棧どめの井戸である。掘形の大きさは、掘削時には直径3.2m、深さ2.7mほどであったとみられるが、井戸枠を抜き取る際に北西方向から穴を掘ったために、最終的には長径約4mに広がっている。井戸枠はほとんど抜き取られ、最下段の横棧の南半分と一部の縦板が残っていたにすぎない。縦板の幅は約20cmあるが、厚さは5mm程度のごく薄いものである。井戸底に、水溜に使われた大小の曲物3箇が遺存しており、このうち上段と中段の曲物の外面に墨書が認められた。中段の

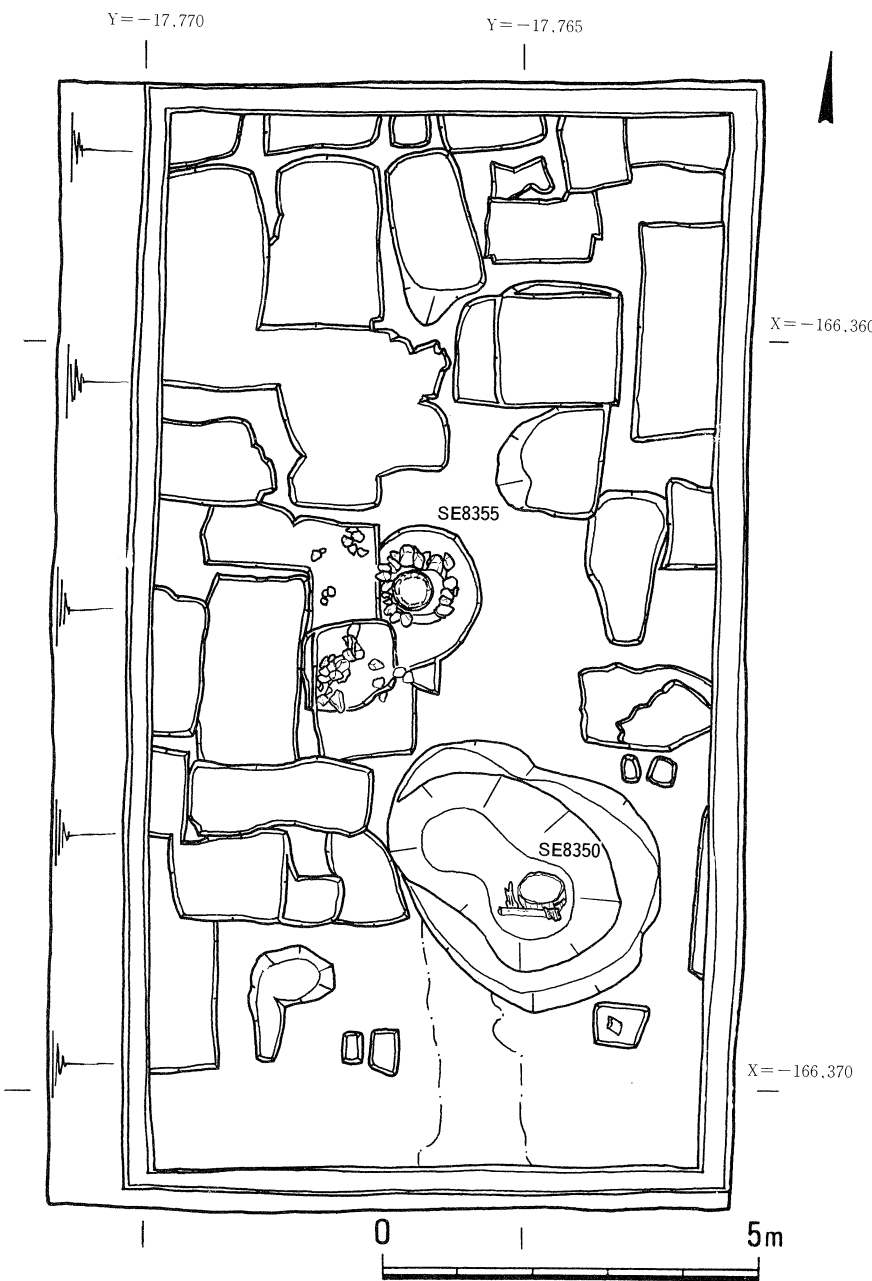


Fig.15 第75-7次調査遺構図(1:100)

それは、「承安四年十月 □□□<sup>七</sup><sub>【貞カ】</sub>」と判読できる。抜取り穴から多数の瓦器と土師器が焼土とともに出土した。

井戸 S E 8355 は、円形掘形をもつ円形石組井戸である。掘形の大きさは、直径 2 m、深さ 2.4 m ほどであるが、湧水はあまり認められない。石組の内法の直径は約 0.8 m あり、人頭大から拳大の川原石を積む。底に曲物を 3 箇利用した水溜があることを確認したが、石組が崩れる可能性があったため最下段までは掘り下げなかった。少量ではあるが 13 世紀頃の土師器などが出土した。

これ以外に、調査区の全域で多数検出した方形ないしは長方形を呈する土坑群は、遺物が乏しくその所属時期を決定できない。しかし、土層観察によれば大半は床土直下から掘り込まれており、比較的新しい時代の遺構と推定される。

井戸 S E 8350 の抜取りからは、多数の瓦器碗・小皿、土師器小皿・羽釜と、鉄釘 3 本が焼土・壁土とともに投げ捨てられた状態で出土した。土器はいずれも 12 世紀後半の特徴をもつものであり、井戸底の水溜として利用されていた曲物に書かれた「承安四年」(1174) の墨書銘とも矛盾しない。縦板として用いられた板が曲物の素材と推定される厚さ 5 mm 内外の薄いものであることから、この井戸の存続年数もあまり長いものとは考えにくく、今後、この時期の土器編年の実年代を考える上で格好の材料となろう。

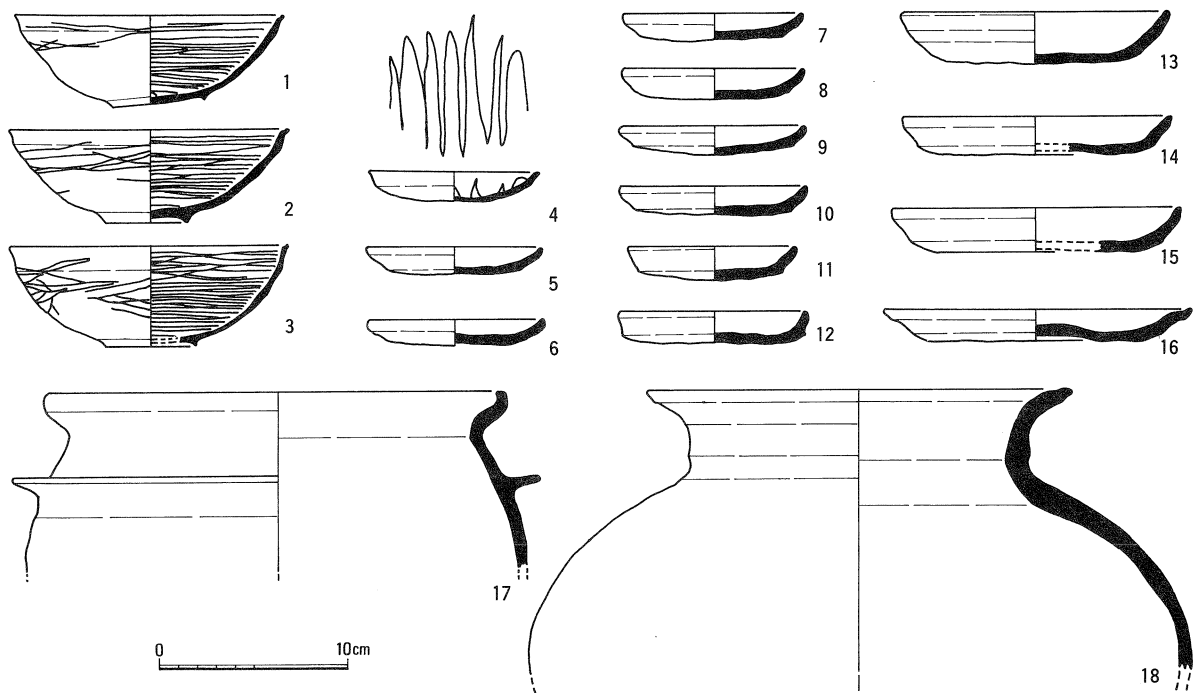


Fig.16 S E 8350 抜取り穴出土土器 (1~4 瓦器 5~17 土師器 18 陶器)

## E 第75-12次調査

(1993年10月～11月)

本調査は奈良県橿原市醍醐町43-3・5・6・7番地において予定されている宅地造成（盛土・整地）、ならびに個人住宅建設に伴う事前調査である。調査面積は、調査区を東西50m、南北8mで設定し、北側で部分的に拡張したので、合計436㎡であった。1994年10月11日から耕土・床土掘削を開始し、同年11月15日に埋め戻しを完了、調査を終了した。

本調査区は藤原宮西方官衙地区の北寄りにあたり、東には内裏跡に作られた醍醐池が望める。また本調査区の南では宅地造成や個人住宅の建設に伴って、発掘調査が実施されてきた。それによって、鎌倉時代に存在した二重の環濠を巡らす土豪の居館と推定される遺構が見つかった。環濠内部の建物は後世の削平によって明かでなかったが、第75-7次調査（本書p.18・19所収）で石組井戸が見つかり、環濠内部に生活空間があることが判明した。さらに井戸底の曲物には「承安四年（1174）十月」の墨書銘があり、環濠居館に関わる遺構および遺物の年代の上限が、従来考えられていたより若干古くなった。しかし、一連の調査では、藤原宮期の遺構がほとんど確認されていない。これについてはこの付近で後世に大規模な地下げがあり、古代の遺構の多くがすでに削平されてしまったと推定されている。したがって、本調査区でも平安時代末から鎌倉時代（12世紀後葉～14世紀）の遺構や遺物が主としてみつかるものと予想された。

### 遺 構

基本層序は上から耕土（厚さ20cm）、床土（厚さ10cm）、地山の黄褐色土層（厚さ20cm）、暗褐色土層（厚さ15cm）である。さらに後述する井戸S E 8272の調査によれば、以下数枚の土層と粘土層を経て、地表下1.2mで砂層に達する。この砂層の下は礫層であろう。すべての遺構は黄褐色土層上面で検出した。検出された遺構は古墳時代から室町時代頃までのもので、なかでも平安時代末期～鎌倉時代初期のものが予想通り主体であった（Fig.17）。以下、所属時代ごとに遺構を説明する。

**古墳時代の遺構** 調査区の東端で検出した斜行溝S D 8271である。その方位の振れから所属時期を推定した。

**藤原宮期の遺構** 掘立柱南北塀S A 8270である。後述する平安時代末期～鎌倉時代初期の建物遺構と比べて、柱掘形が方形（一辺30cm）であることから所属時期を推定した。柱間寸法は2～2.1m（7尺）で、6間分を検出した。ただし、その方位は北で東に振れる。

**平安時代末期～鎌倉時代の遺構** 掘立柱建物2棟、南北溝1条、井戸1基、土坑数基を検出した。

S B 8273は桁行4間、梁行3間に復元できる東西棟で、柱間寸法は1.4～1.6mである。柱掘形は直径30cmの円形である。この中央に石組井戸S E 8272が位置するので、これは井戸を覆う建物、すなわち井戸屋形である。



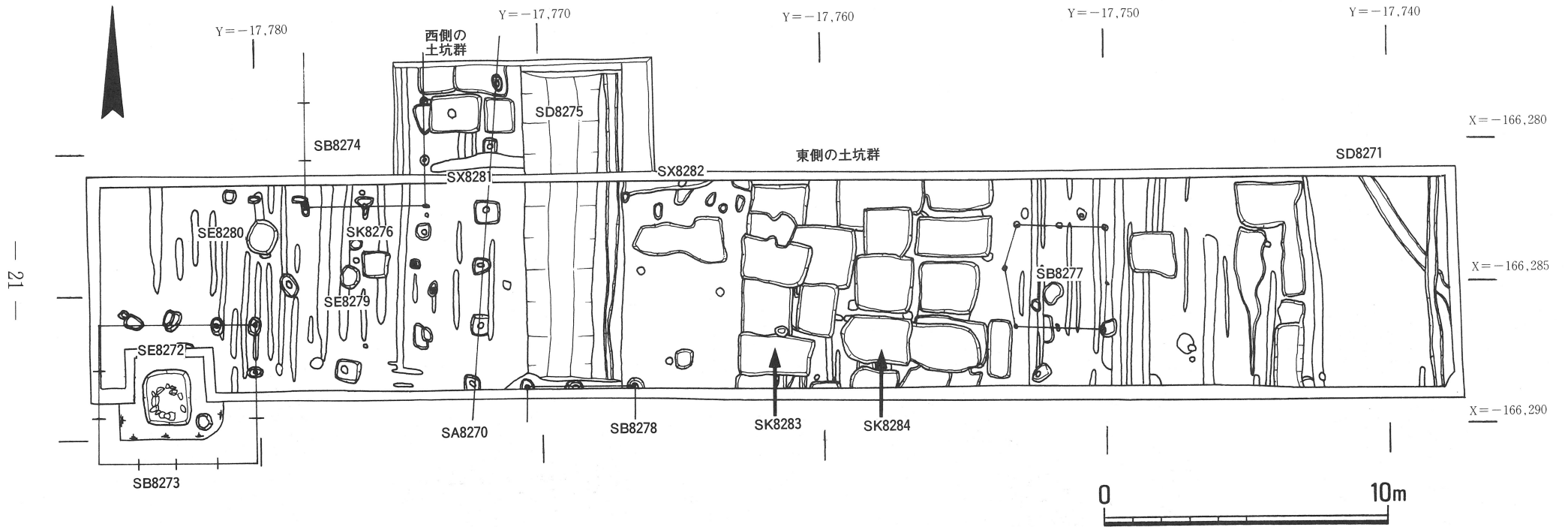


Fig.17 第75-12次調査遺構図 (1 : 200)

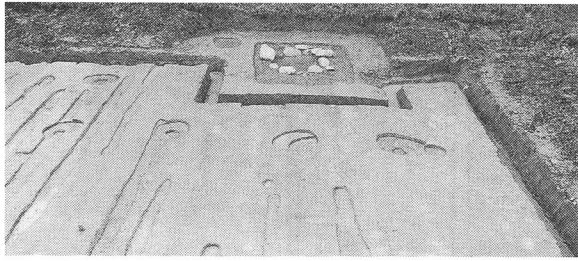


Fig.18 井戸屋形S B8273 (北から)



Fig.19 石組井戸S E8272 (北から)



Fig.20 東面環濠S D8275 (北から)

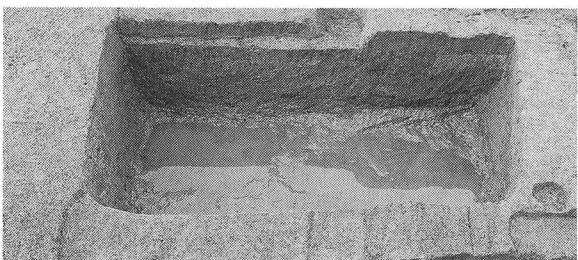


Fig.21 大型土坑S K8283 (南から)

S E 8272は下端に曲物を三段重ねで置き、その上の大半を人頭大から一抱えもある石を積み上げて構築した、深さ2mの井戸である。掘形は石組部分が東西1.5m、南北2mの長方形で、曲物部分が円形である。曲物下端は砂層に達しており、現在でもこんこんと水が湧き出す。石組の埋土からは瓦器羽釜や土師器小皿、カメの甲羅などが出土した。

S B 8274は桁行3間以上(柱間寸法1.6~2m)、梁行2間(柱間寸法2.1m)の南北棟である。柱掘形は円形で、直径15cmと小さい。

S D 8275はS B 8273・8274の東側にある南北方向の素掘り溝である。その縦断面形は逆台形で、上幅が2.5m、底幅が0.9~1.0m、深さが1.1mである。埋土からは瓦器羽釜・小皿、土師器片口・小皿などが多量に出土した。埋土に純粹の砂層を含まないので、これは頻繁な流水を伴う水路の類ではなく、環濠の一部とみられる。

S K 8276はS B 8274の南側に掘られた平面形が長方形の土坑である(Fig.22)。その底面に完形の瓦器碗7点と瓦器小皿・土師器小皿各1点が一括して埋められていた。

**室町時代以後の遺構** 掘立柱建物2棟、井戸2基、土坑多数を検出した。

S B 8278は南北棟の北妻で、梁行2間、柱間寸法は1.2~2.0mである。S D 8275が埋没してから建てられている。

S B 8277は東西、南北ともに2間(柱間寸法1.5m)の建物で、柱掘形は直径15cmの円形である。これはS B 8273・8274やS D 8275から一定の距離があるので、当該期に所属するものと推定した。

S E 8279・8280は、それぞれ直径1.2m、0.7mで、深さ1 m以上の素掘りの井戸である。埋土からは瓦器片などが出土した。

S D 8275の東西にあるS K 8283・8284などの東側の大型土坑群は、幅9 mの範囲に南北に分布し、3～4列からなる帯状をなす。各土坑開口部の平面形は、長辺2.5m前後、短辺1.5m前後、深さは0.8～1.0mで、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である（Fig.21）。土坑の埋土は埋め戻したような堆積をし、土坑同士は相互に切り合う。埋土からは瓦器片や中国産磁器、宋銭などが出土したが、底面から完形品が出土することはなかった。これに対して、西側の大型土坑群は平面形が東側のものに比べて小さく、浅い。以上のほか、不整形土坑S X 8281・8282や単独の柱穴、耕作溝多数などを検出した。埋土からは瓦器片や木炭片が出土した。

### 遺物

土器は藤原宮期のものが数点で、12世紀中頃～14世紀の瓦器と土師器が大多数を占める。なかでもS K 8276底部に12世紀中頃の瓦器碗・小皿と土師器小皿が一括して埋納されていた（Fig.22）。うち瓦器碗3点が入子状に重なっていた。4点の瓦器碗の見込と2点の底部外面に「×」印を焼成後に針書きしている。なおS E 8272掘形・埋土の瓦器は13世紀末～14世紀で、S D 8275埋土の瓦器は12～14世紀のものである。さらに中国産（宋代か）青磁碗の破片がS K 8284などの大型土坑群とS D 8275の埋土、中国産白磁皿の破片がS D 8275から出土した。

瓦はS E 8279の埋土から藤原宮式軒平瓦6643Cが出土したほか、数片の丸瓦と平瓦がある。

銅銭は宋銭で、「熙寧元寶」（1068年初鑄）がS K 8284から1点、「元符通寶」（1098年初鑄）が他の大型土坑から1点出土した。

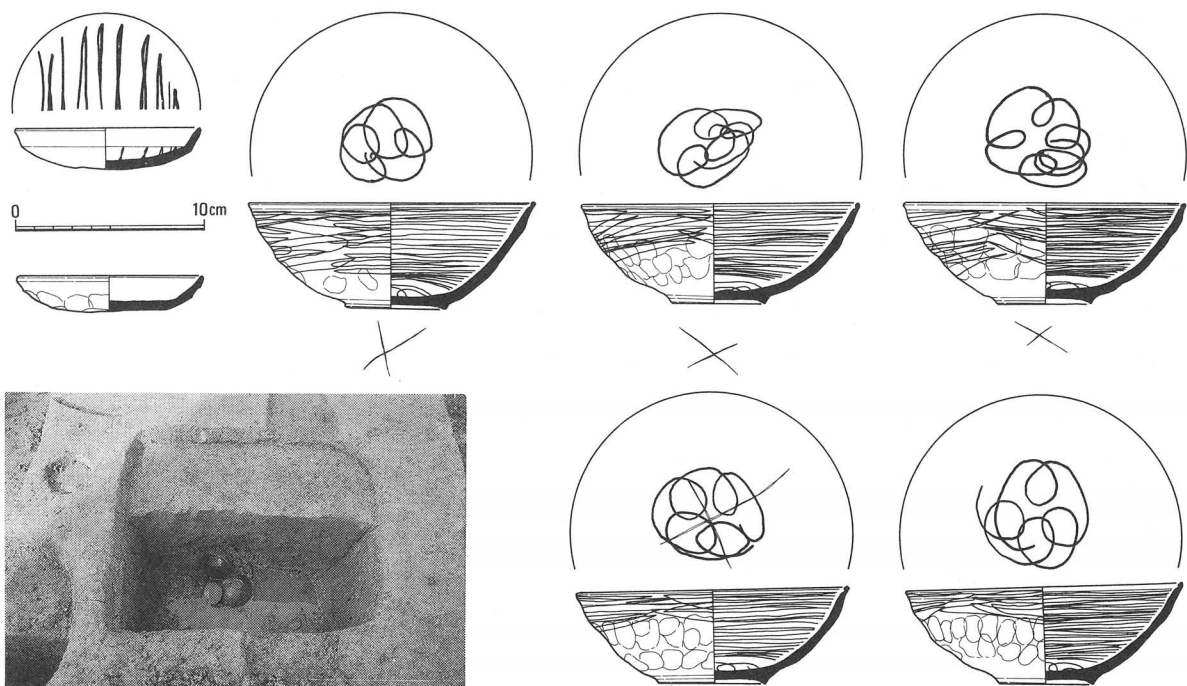


Fig.22 土坑S K 8276出土瓦器と出土状況（左下写真）

## まとめ

**藤原宮期の遺構はなぜ希薄か** 藤原宮西方官衙地区は東方官衙地区に比べて、遺構密度が低い。とくに西方官衙地区の北部では、藤原宮期の遺構がほとんどみつかっておらず、本調査でも然りである。これについては従来から後世の「地下げ説」が指摘されていた。後世の地下げが相当深く、藤原宮期の遺構が大部分削平されたという可能性である。確かに平安時代末期の環濠に関わる遺構も、すでに生活面が失われており、またS A 8270とS B 8273の柱穴の深さは15～20cmと、平面形の大きさに比べて浅すぎるし、さらにいわゆる耕作溝も他の調査地のものと比べて浅すぎる。

S E 8279から出土した藤原宮式軒平瓦などは、かつて本調査区に藤原宮期の生活面がまがりなりにも存在したことを示そう。しかし、その数量たるや、S E 8272とS D 8275という掘形の深い遺構からのものを含めても、微々たるものである。したがって、藤原宮期のこの付近に建物があまり建てられないまま、平城遷都を迎えたという可能性も考えられよう。今後、藤原宮・京の地形的環境を踏まえた、当時の都市計画と実際の土地利用の現状についての考察が必要である。

**平安時代末期（12世紀中頃）につくられたもうひとつの環濠** S D 8275はその構造と周辺の遺構からみて、一重の環濠の一部と推定される。つまりS B 8273・8274、S E 8272は、東をS D 8275に囲まれた内部施設の可能性が高い。つぎにその年代の問題である。環濠などの施設は、S K 8276出土の瓦器の年代から12世紀中頃に設置され、S E 8272とS D 8275出土の瓦器の年代から14世紀まで存続したとみられる。これらの瓦器の年代が本調査区のすぐ南で発見された二重の環濠や石組井戸出土の瓦器の年代と共通することからみて、S D 8275と南の二重の環濠は、同時に存在した可能性が高い。S D 8275とS K 8284などから出土の青・白磁と宋銭は、本来環濠の内部施設で使われたものだろう。

**室町時代土坑群の性格は** S K 8283・8284を含む東西の大型土坑群の年代は、S D 8275の西側にそれらと同様の土坑群があることから、環濠居館廃絶後である。また土坑の埋土の遺物には、江戸時代の染め付けなどが含まれていないことから、所属時期は室町時代と推定する。これらの性格については、集落墓の可能性を指摘しておきたい。それは土坑の形状が直方体を呈し、相互に埋め戻してから切り合い関係があり、土坑群が特定の範囲に分布しているなどの点が、いわゆる中世の粘土採掘土坑と異なるからである。類似した遺構は、推定山田道第5次調査（『概報』24では、粘土採掘土坑と推定）などでもみつまっている。人骨、棺桶、さらに副葬品といえるものが、今後付近の類似した遺構から発見されるのを待って、土坑の性格に結論を下したい。

## 2 東二坊大路・宮東面・東方官衙地区の調査（第75-13次）

（1994年11月～12月）

本調査は、市道の拡幅に伴う事前調査として橿原市高殿町391-1、392-1、402-1、374-1において実施した。調査地は道路両側の法面であり、これを東西190mあまりにわたって発掘した。発掘面積は384㎡である。

当該地は、藤原宮東方官衙および宮東面外周部の左京四条三坊の東北坪にあたり、これに関連する遺構が期待できるところである。

### 遺 構

検出した遺構には藤原京東二坊大路の東西両側溝、藤原宮東面外濠、東面大垣、東面内濠、先行条坊跡などがある。以下、主要な遺構について述べる。

S D 170は、藤原宮東面外濠である。溝幅は検出面で5.7m、濠底で3m、深さは1.3mを測る。濠内の堆積は暗灰色土、灰色粘土、灰色砂土、暗灰色粘土に分かれる。灰色粘土層は0.5mあまりと厚く、なかには相当数の木簡を含む多量の棒状木片、木屑などが堆積していた。木製品の他には、ごく少量の土器片と瓦片が出土したのみである。この灰色砂土、灰色粘土からは1cm<sup>2</sup>あたり2,000個を越す寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫など）を検出した。この寄生虫卵の出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強い。なお、この鑑定結果については、後述する。

S A 175は、藤原宮の東面大垣である。S D 170の心から西20mの位置にある。柱掘形と抜き取り穴の一部を2箇所検出した。掘形の規模は東西が約2m。南北は不詳である。

S D 2300は、藤原宮の東面内濠である。S A 175の西12.5mにある。溝幅は検出面で3.2m～2.6m。溝の東の肩はえぐられ大きく広がる。検出面からの深さは0.9mである。濠内からは偏行唐草文軒瓦（6643C、6646D、6647A・D）や軒丸瓦（6279B、6278F）、および木簡1点と削り屑2点などが出土した。

S D 2281は、第27次調査で東二坊大路西側溝とされ、第32次調査では藤原京廃絶以後の溝とされた南北溝である。a（東）、b（西）の堆積があり、aからbと流れが移動している。aは幅1.2m、深さ0.4m、東の肩に護岸用の玉石がある。bは幅1～2m、深さ0.3mである。溝底にはa、bともに砂が堆積する。遺物としては、土器片が少量出土した。

S D 3031はS D 2281の西6mの位置にある南北溝である。第32次調査の成果から、東二坊大路西側溝とされた。幅3～3.2m、深さ0.6mである。溝内には砂が堆積し、土器が少量出土した。S D 3031の位置は外濠S D 170の東40.35mにある。

S D 3035は、S D 3031の西約6mにある南北溝である。幅1.3～1.6m、深さ0.4mである。溝内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。第32次調査では、溝内に堆積した土器が「飛鳥

Ⅲ」を主体とすることから他の遺構より遡る遺構とされた。

S D 8310は、S D 2281の東10.5mにある南北溝である。幅1.5m、深さ0.3m。溝内には炭化物を含む灰色砂が堆積し、焼けコゲのある木屑や土器（須恵器・土師器）片が出土した。その位置と溝の状況からみて、東二坊大路東側溝の可能性が高い。

S B 8311は、左京四条三坊西北坪で検出した掘立柱の柱穴で、南北棟建物の南北いずれかの妻にあたると思われるが、東西塀の可能性もある。柱間寸法は1.6mである。

S A 8312は、左京四条三坊西北坪で検出した東西方向の掘立柱の柱穴である。柱間寸法は不等であり、塀と想定したが、建物の可能性もある。

S A 8313は、藤原宮内濠の西側で検出した3間分の東西塀である。柱間寸法は2.1m等間である。第29次調査では、これに並行して5間の東西塀S A 2810を検出しており、あるいは一体となって建物となる可能性がある。その場合は桁行5間、梁行2間の東西棟となるが、なお詳しい検討が必要である。

S D 2844は、宮内にある先行条坊の東二坊坊間路S F 2115の西側溝である。溝の幅は0.98m、深さは0.14mである。上面が削平をうけて浅く、遺物は出土しなかった。

S D 2845は、東二坊坊間路S F 2115の東側溝であり、溝幅0.97m、深さ0.35mである。S D 2844と同様に、顕著な遺物はなかった。

以上の東西両側溝の検出により、S F 2115の路面幅は約6.5mと確定した。

## 遺 物

遺物には土器、瓦磚および木製品がある。土器は藤原宮期の須恵器、土師器と下層の弥生式土器および土師器などがあるが、量的には少ない。

瓦磚は内濠S D 2300に集中しており、軒瓦はすべてここから見つかった。軒丸瓦には6279B、6278Fの2型式2点があり、軒平瓦には6643C、6646D、6647A、6647Bの3型式2種計7点がある。小面積の調査に関わらず、完形品の出土が目立った。

木製品には大量の棒状品と木筒、曲物などがある。棒状品は長さ17・18cmから22・23cm、幅0.5～0.6cmほどのものが目立つ。このなかには、やや細い「箸」状品も含まれている。棒状品が堆積した土層からは1 cm<sup>2</sup>あたり2,000個を越す寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫など）を検出しており、その出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強く、これらの棒状品は糞便にともなう<sup>チヌツギ</sup>籌木であろう。これは糞へらともいい、いわばトイレの「落とし紙」である。

木筒は外濠S D 170と内濠S D 2300から見つかった。このうち大多数は外濠から見つかっているが、現在整理中であり、ここでは主要な積文を掲げるのにとどめる。

縣主里 [ ] 直若万呂 031 115×21×6  
付札である。内濠出土。

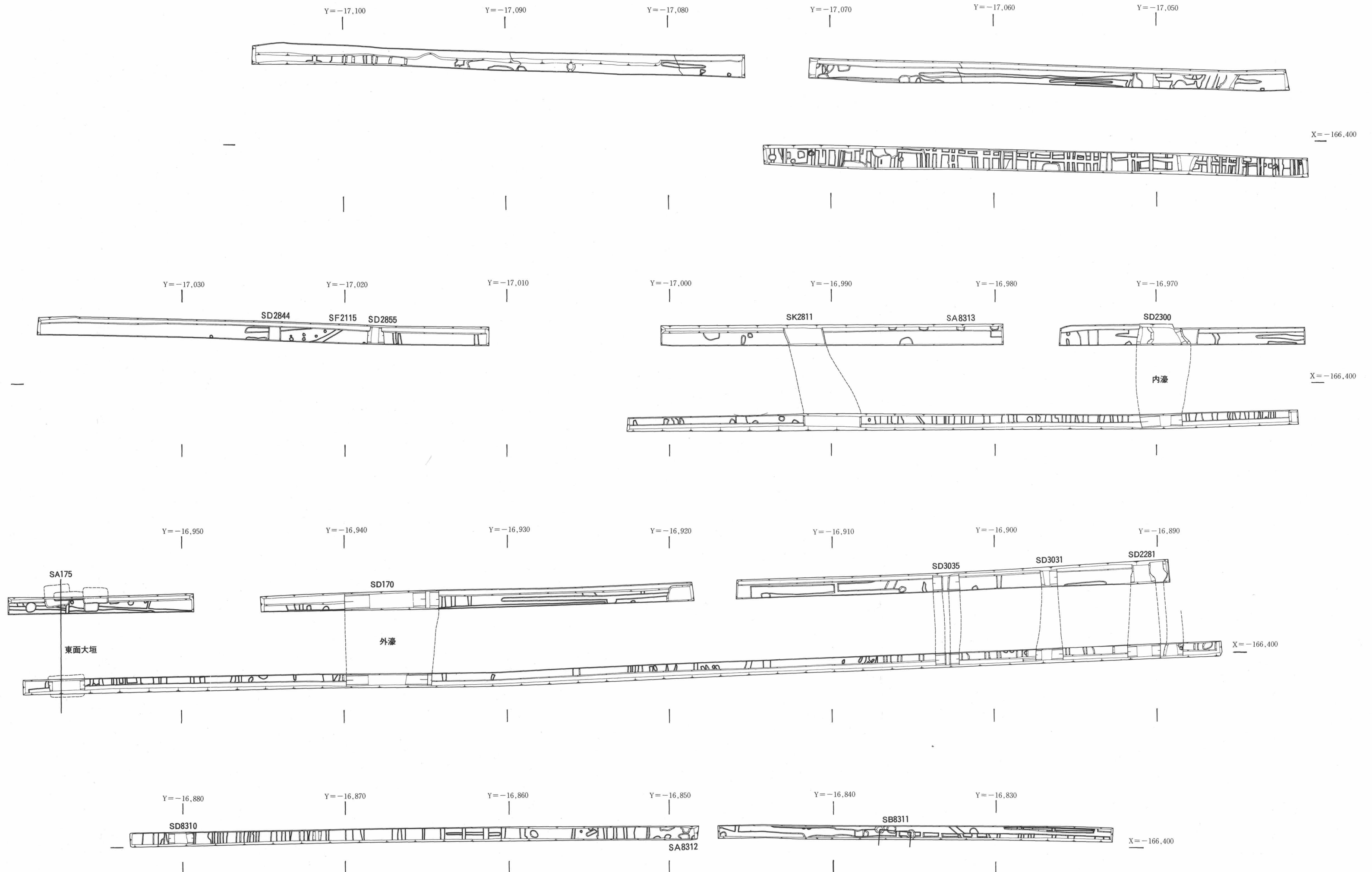


Fig.23 第75-13次調査遺構図 (1:200)

御取鮑□石 039 (197) × 29 × 5

・頓首天下達……字下急

・急可罷処在故日中之……□被賜菓

011 (125+65) × 27 × 4

この2点は外濠S D 170の木簡である。前者は付札である。

外濠の木簡は半分ほどに割り裂いたものが多く、木簡としての機能を終えた後に半分に割って<sup>テユウギ</sup>籌木としたのであろう。

木製品としてはほかに、曲物の底板などが数点出土した程度である。このように、大量の木製品は棒状品が主であり、相当数伴う寄生虫卵のありかたと考えあわせると、外濠には糞便とトイレ用品を一括して投棄した可能性が高い。

#### まとめ

本調査の成果のひとつは、東二坊大路東西両側溝の検出である。東二坊大路の東側溝に南北溝S D 8310をあてることは、溝の位置と水が流れた痕跡を示す溝内の砂の堆積、および松明の一部とみられる焼けコゲのある木屑の出土などによって、ほぼ明らかであろう。問題は、対となる西側溝の比定である。

東二坊大路西側溝については、第27次調査の発掘段階で南北溝S D 2281がそれにあたるとみた。しかし、その後の第32次調査では、この溝に平安初期の土器が含まれることが明らかになり、この溝を西側溝にあてることに疑問が生じた。

S D 2281の西6mと12mの位置には、これに平行する2条の南北溝がある。西6mにあるのがS D 3031、同12mにあるのがS D 3035である。このうち、S D 3031は溝内に堆積した遺物の年代から側溝として矛盾がないのに対し、S D 3035は溝の土器が「飛鳥Ⅲ」であることから、前者を西側溝、後者を宮造宮前にあてたのである。

しかし、S D 3035に関してはその後の検討によって「飛鳥Ⅳ」的な土器を含むことが判明し、S D 3031と一連の溝である可能性がでてきた。したがって、東二坊大路西側溝としては、S D 3031とともにS D 3035も候補となりうる。

いま、S D 2281とそれに平行する3条の溝（心心距離）との間隔を示すと、

a) S D 8310～S D 2281=10.5m

b) S D 8310～S D 3031=16.6m

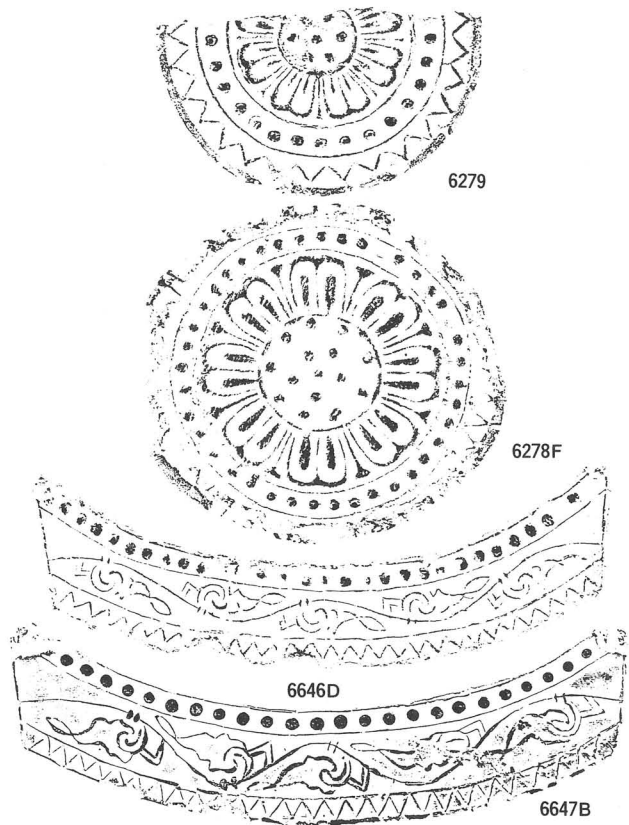


Fig.24 S D 2300出土軒瓦 (1 : 4)



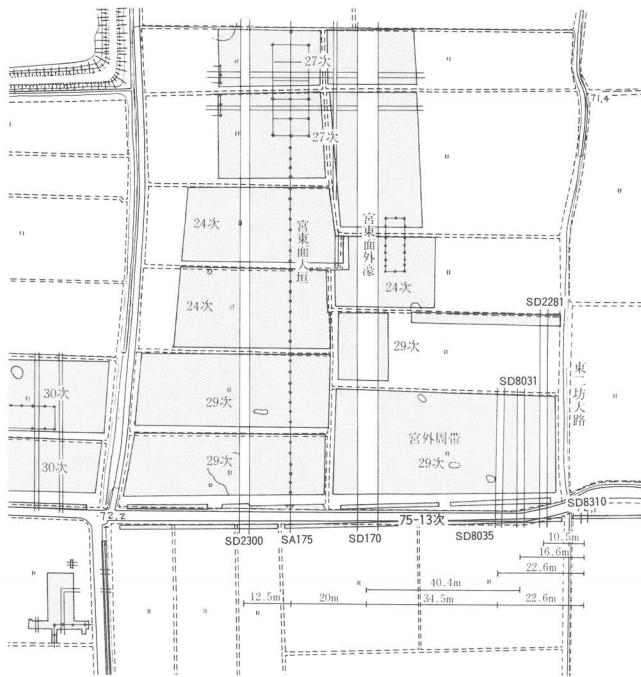


Fig.25 宮東面遺構概略図 (1 : 2000)

c) S D 8310～S D 3035 = 22.6m  
 となる。このうち、c) の22.6mは平城京での大路推定値の7丈(21m)に近いが、従来、他で検出した藤原京大路の路面幅とやや開きがある。他方、b) の16.6mはこれまでの成果とあまり隔たらないので、ここではS D 8310とS D 3031を東二坊大路の東西両側溝にあて、S D 3035に関しては今後の課題としておきたい。

調査成果の二は、藤原宮の東西規模について、新たな知見を得たことである。これまで、藤原宮の東西大垣間の距離については、926.6m程度に復元していた。しかし、調査の過程

で宮の東辺部を調査した第27次・32次調査の測量成果に誤りがあり、その値がかなり大きいことが判明したために、改めて、計算を行った。

第75-13次調査	第66-11次調査	第34次調査
東面大垣心	西面大垣心	西南隅大垣心
X = -166,406.40	X = -166,434.32	X = -167,025.664
Y = -16,957.650	Y = -17,884.72	Y = -17,879.397

第34次調査で検出した宮西南隅の心と第66-11次調査で検出した宮西面大垣の心から、西南大垣の振れを求めると、0°30'57"北で西に振れをもつ。藤原宮の大垣が正方形と仮定して、東西の振れを求め、今回調査の東面大垣心と、第66-11次調査の西面大垣心の距離を座標上で求めると、927m 28cmとなる。これは従来の値より68cmほど大きい数字である。

### 藤原宮外濠における寄生虫卵・植物遺体分析

試料 試料は外濠内採取の以下の記載の4点である。

外濠	5 A J B	RR 26・27	灰砂土	A
			灰砂土	B
	5 A J L	RQ 26・27	灰粘土	A
			灰粘土	B

寄生虫卵分析 分析は、試料1cm<sup>3</sup>にフッ化水素酸処理を施しプレパラートを作製して行った。1cm<sup>3</sup>あたりの出現数は計数比から算定した。結果は表(Tab.6)と図(Fig.26)に示した。

寄生虫卵は回虫、肝吸虫、横川吸虫、日本海裂頭条虫、有・無鉤条虫、マンソン裂頭条虫が

検出された。4 試料中 3 試料において試料 1 cm<sup>3</sup>あたりの出現密度が2,000をこえる。鞭虫卵と肝吸虫卵は各試料とも多く、回虫卵と横川吸虫卵は試料によって異なる。寄生虫卵組成から人に起因する寄生虫卵とみなされる。寄生虫卵の出現密度からみて、外濠の堆積物に多くの糞便が含まれているとみなされる。

学名	分類群 (1/10cc中)		5AJB RR26・27		5AJL RQ26・27	
	和名	部位	灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
<i>Ascaris lumbricoides</i>	回虫	卵殻	52	14	46	83
<i>Trichuris trichiura</i>	鞭虫	卵殻	115	41	103	104
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫	卵殻	81	9	58	58
<i>Metagonimus yokogawai</i>	横川吸虫	卵殻	4		6	39
<i>Diphyllobothrium nihonkaiense</i>	日本海裂頭条虫	卵殻		2	2	2
<i>Taenia solium-saginata</i>	有・無鉤条虫	卵殻			1	
<i>Diphyllobothrium mansoni</i>	マンソン裂頭条虫	卵殻	1			
Total	計		253	66	216	286
	(1cm <sup>3</sup> に算定)		(2530)	(660)	(2160)	(2860)

Tab. 6 藤原宮外濠における寄生虫卵分析結果

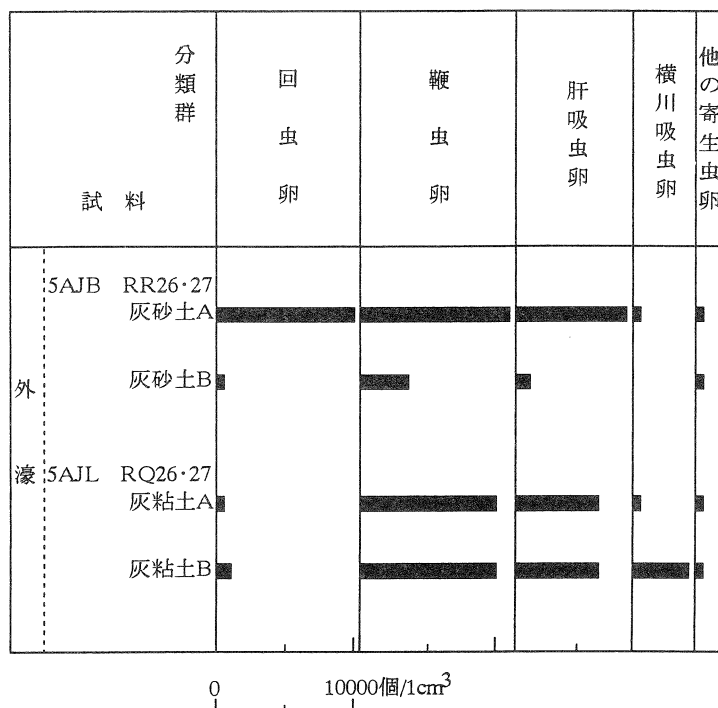


Fig. 26 藤原宮外濠における寄生虫卵組成

**花粉分析** 分析は、試料に水酸化カリウム処理、フッ化水素処理、アセトリシス処理の各処理を施し行った。花粉出現量（定量）については、その計数比から1 試料 1 cm<sup>3</sup>の出現数を算定した。結果は表（Tab. 7）と図（Fig. 27）に示した。

各試料ともほぼ同じ傾向を示し、樹木花粉より草本花粉が多い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・スギ・マツ属複雑管束亜属の順に多い。草本花粉ではイネ科・アカザ科ーヒユ科・

学名	分類群	和名	5AJB RR26・27		5AJL RQ26・27	
			灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
Arboreal pollen		木本花粉				
<i>Podocarpus</i>		マキ属		1		
<i>Abies</i>		モミ属	2	2	2	1
<i>Tsuga</i>		ツガ属	3	6	2	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複維管束亜属	12	26	8	9
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	16	48	27	21
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1	4	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科ーイスガヤ科ーヒノキ科	5	5	1	3
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ		1		
<i>Betula</i>		カバノキ属		2		
<i>Corylus</i>		ハシバミ属	1	1		1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属ーアサダ	2	3	1	1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>		クリーシイ属	12	27	7	6
<i>Fagus</i>		ブナ属	2		1	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	4	6	2	4
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	43	79	37	24
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属ーケヤキ	5	4	6	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属ームクノキ	6	2	4	1
<i>Acer</i>		カエデ属	2			
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属		1		
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属ーガマズミ属			2	
Nonarboreal pollen		草本花粉				
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属ーミクリ属	3		13	5
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属		2		
Gramineae		イネ科	50	152	44	55
<i>Oryza type</i>		イネ属型	3	6	6	4
Cyperaceae		カヤツリグサ科	3	12	3	9
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	7	1	12	9
<i>Rumex</i>		ギンギシ属	4		1	1
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	8	6	5	2
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科ーヒユ科	106	16	31	33
Caryophyllaceae		ナデシコ科	7	3	4	3
Ranunculul		キンボウゲ属	23	4	8	4
Cruciferae		アブラナ科	11	24	9	7
Umbelliferae		セリ科	5	2	1	4
Solanaceae		ナス科	1	2	1	1
<i>Plantago</i>		オオバコ属	4	1	6	3
Valerianaceae		オミナエシ科			1	
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキズル	3	1		
Lactucoideae		タンポポ亜科		2		1
Asteroideae		キク亜科	2	3	2	2
<i>Carthamus tinctorius</i>		ベニバナ	2	1	1	2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	37	30	42	26
Fern spore		シダ植物孢子				
Monolate type spore		単条溝孢子	1	38	5	10
Trilate type spore		三条溝孢子	2	10	2	8
Arboreal pollen		木本花粉	116	218	101	72
Nonarboreal pollen		草本花粉	280	268	190	171
Total pollen		花粉総数	396	486	291	243
Unknown pollen		未同定花粉	6	4	5	2
Fern spore		シダ植物孢子	3	48	7	18

Tab. 7 藤原宮外濠における花粉分析結果

ヨモギ属が優占する。ガマ属ーミクリ属・ミズアオイ属の水湿地植物が出現する。アブラナ科は3%前後の出現率を示す。

**種実同定** それぞれ100ccを0.25mmの篩で水洗選別し、分類を肉眼および実体顕微鏡下で行った。各試料とも傾向は類似し、樹木の種実より草本の種実がきわめて多い。ヒユ属・ナデシコ科・キンボウゲ属などが多い。水湿地植物のコナギも検出されている。食用となる植物の種実としては、ウリ類種子が多く、他にイネ類・ヤマモモ核・キイチゴ属核・サンショウ種子・マタタビ種子・ナスが出現している。

学名	分類群	和名	部位	5AJB RR26・27		5AJL RQ26・27	
				灰砂土A	灰砂土B	灰粘土A	灰粘土B
arbor		樹木					
<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.		ヤマモモ	核				1
<i>Rubus</i>		キイチゴ属	核	3	2	12	11
<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.		サンショウ	種子				2
<i>Actinidia polygama</i> Planch. ex Maxim.		マタタビ	種子	1	1	2	
herb		草本					
<i>Chara</i>		シャジクモ属	卵孢子			1	
<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	穎	4			14
<i>Setaria</i>		エノコログサ属	穎		2		1
Gramineae A・B		イネ科A・B	穎	2	4	10	2
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.		イボクサ	種子	8			4
<i>Monochoria Korsakowii</i> Regel et Maack		ミズアオイ	種子	1			
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl		コナギ	種子	7	19	18	24
		var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.					
<i>Scirpus</i>		ホタルイ属	果実		1		6
<i>Cyperus</i>		カヤツリグサ属	果実		5	2	6
<i>Fimbristylis dichotoma</i> Vahl		テンツキ	果実				1
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実		1		2
<i>Polygonum Thunbergii</i> Sieb. et Zucc.		ミゾソバ	果実	1	5	7	7
<i>Polygonum</i> A・B		タデ属A・B	果実	21	16	37	40
<i>Rumex</i>		ギシギシ属	果実	3	5	6	8
<i>Chenopodium</i>		アカザ属	種子		6	2	6
<i>Amaranthus</i>		ヒユ属	種子	181	383	85	134
<i>Portulaca oleracea</i> L.		スベリヒユ	種子	2	4	9	8
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子	35	46	27	22
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属	果実	63	41	8	32
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子	8	7	29	19
<i>Hydrocotyle</i>		チドメグサ属	果実	16	7	18	
<i>Perilla</i>		シソ属	果実				6
<i>Solanum melongena</i> L.		ナス	種子	5	1	4	2
Solanaceae		ナス科	種子	2	5	18	23
<i>Cucumis melo</i> L.		ウリ類	種子	32	3	28	44
			破片	8	2	11	12
<i>Eclipta prostrata</i> L.		タカサブロウ	果実	8	6		10
Total		合計		411	572	334	447

Tab. 8 藤原宮外濠における種実同定結果 (試料100cc中)

考察 外濠堆積物の分析の結果、4試料中3試料が2000個をこえる寄生虫卵の出現密度を示し、糞便が多量に含まれる堆積物とみなされる。花粉分析では、周囲から供給された花粉が多いようで、アブラナ科が少し出現するほかは、食用植物の花粉はあまり出現していない。種実では4試料中3試料から1割から2割程度果実や種子の食べられる植物種実が含まれている。以上、外濠は人の糞便が多量に混ざりつつ、周囲の植生からも花粉や種子が供給されて堆積したと考えられる。

なお、周囲の植生であるが、ヒユ属 (アカザ科-ヒユ科)・ヨモギ属・イネ科などのやや乾燥した人里に好んで生育する草本が多く、排水のよい乾燥地であったと推定される。外濠には、

ガマ属-ミクリ属やコナギの水湿地植物やタデの仲間が繁茂しており、水湿地状の状態であった。なお、周辺地域にはコナラ属アカガシ亜属を主にスギ・マツ属複維管束亜属などの樹木が多かった。

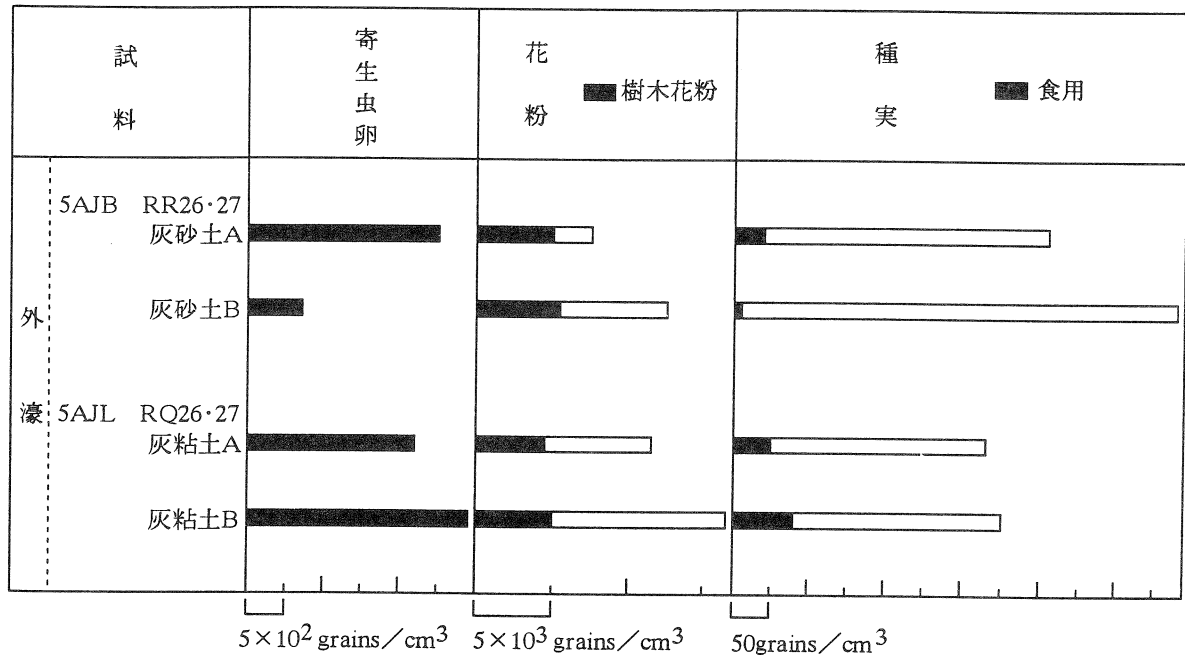


Fig.27 藤原宮外濠における寄生虫・花粉・種実出現図

《参考文献》

金原正明「花粉分析による古環境復原」『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』角川書店 1993年

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』1992年

Peter J.Warnock and J.Reinhard(1992). Methods for Extraxing Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science

金原正明「便所堆積物からさぐる古代人の食生活」『助成研究の報告』味の素食の文化センター 1994年

(金原正明・金原正子・中村亮仁)

### 3 宮西面外濠の調査（第75-1次）

（1994年4月）

本調査は道路築造に伴う事前調査として、檀原市四分町で行ったものである。調査地は藤原宮西面外濠の位置にあたる。東西25m、南北4mの調査区を設けて調査を実施した。層序は上から順に、褐色粘質土（耕作土）、緑灰色微砂（床土）、黄色粘質土、茶褐色土、暗褐色粘質土（弥生時代包含層）、青灰色粘質土（地山）である。

西面外濠SD260は、暗褐色粘質土の上面から切り込む。本調査区における濠幅は東西約13mである。最上層は青灰色微砂層で、この土層の下から外濠の堆積層暗灰色粘質土を耕作土とする10世紀代の水田を検出した。水田は外濠の東寄りに2枚あった。水田SX8314は東西約10m、南北長は調査区外のため不明である。南の水田SX8315との間は、下幅35cm・高さ15cmの畦畔で区画する。なお、西に偏した位置に水口を切っており、南側から北側の水田に水を送っていたと考えられる。水田の西側には下幅70cm・高さ12cmの畦畔がある。この西に幅1.7m・深さ0.5mの南北溝SD8316がある。溝の埋土は、暗青灰色微砂や青灰色細砂である。なお、水田SX8314には畦畔を切ってSD8316から水を取り入れた痕跡が残っていた。

さらに下げて、暗灰色砂質土に達したが藤原宮期の堆積層にいたることは出来なかった。

今回の調査において、西面外濠は10世紀代には水田化されていたことが明らかとなり、中世におけるこの地域の土地利用を考える上で貴重な資料を提供することとなった。

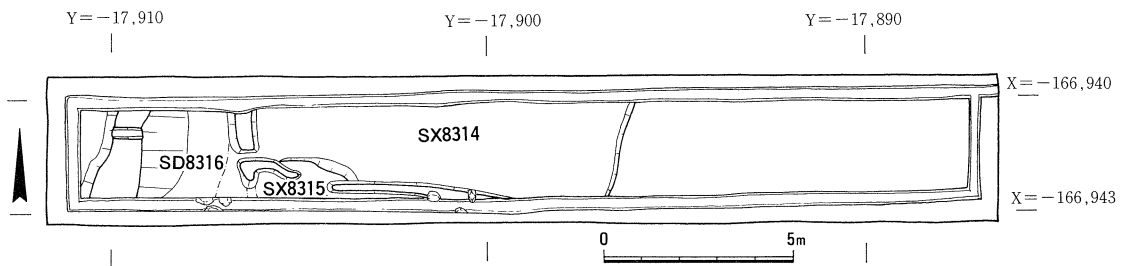


Fig.28 第75-1次調査遺構図（1：200）

## 4 宮内その他の調査

### A 第75-5次調査

(1994年6月～7月)

本調査は水道管の付け替えに伴う事前調査として、橿原市高殿町で行ったものである。調査地は藤原京左京六条三坊西北坪から宮西方官衙地区にかけて、幅70cm、総長約900mにおよぶ。深さは一律に地表下1.4mである。西面大垣周辺の諸施設、東西両朝集殿の検出が期待されたが、調査区の幅が狭く、かつ旧管埋設時の掘形の再掘削を原則としたこともあって、藤原宮期の遺構と確定できるものは検出できなかった。

### B 第75-9次調査

(1994年9月)

本調査は個人住宅改築に伴う事前調査である。調査地は藤原宮内の東方ほぼ中央部に位置する。これまでも、調査地のある高殿の集落内で小規模な調査がおこなわれているが、藤原宮に関連する遺構はなく、主として中世の遺構が検出されているのみである。本調査でも藤原宮に関わる遺構は検出できなかったが、中世の遺構を検出した。検出した遺構は池状遺構の一部である。基本層序は現代の地表面から近代の整地土、褐灰色土、14～15世紀の土師器を含む暗青灰褐色土である。

池状遺構 S X 8240は掘形を掘り、その内側に人頭大の石を並べ、裏込土で石を固定する。部分的には階段状に二段に石が据えられている。まわりの石の上端から底までは約30cmと浅く、池であるかどうか疑問がある。調査区内では、石はほぼ四半円状に並んでおり、全体は直径3m程度の円形と想像される。

池状遺構内からは14～15世紀の瓦器が出土した。

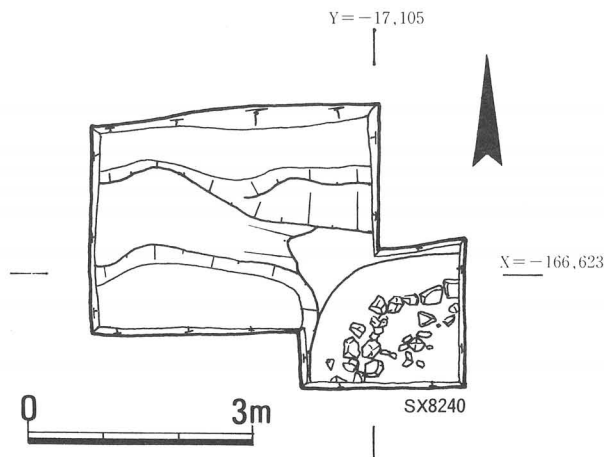


Fig.29 第75-9次調査遺構図(1:100)



Fig.30 池状遺構 S X 8240